風立ちぬ

つよく　かしこく　あたたかく

立川中学校通信

第7号

令和元年9月17日（火）発行

全国学力学習状況調査に見る 立中３年生の良さと今後の指導の方向性

報道でも伝えられているように、４月１８日に全国の３年生を対象に実施された全国学力学習状況調査の結果が、７月末に学校に届けられました。今年度は、基礎的な知識に関する問題Aと応用に関する問題Bが一体化された他、国語・数学に加えて英語が初めて実施されました。この調査からは、立中生の良さとこれからの指導の方向性が明らかになりました。

この調査は、国・数・英の教科の学力と生徒質問紙、学校質問紙からなっており、以下にその結果をお知らせします。

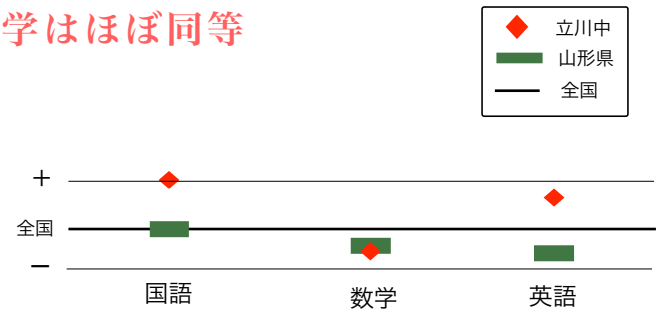
この調査で測定できる学力は、学力の特定の一部分であることと、学校における教育活動の一側面に過ぎないことを踏まえなければなりませんが、この結果を受け止め、今後の教育活動に生かしていきたいと考えています。

学力調査から見えること

全国に比べ、国語・英語は高く、数学はほぼ同等

国語と英語は全国を大きく上回っています。数学は若干下回るものの、ほぼ同等の結果です。数学の問題毎に詳しく見ると、思考の問題は全国を上回り、知識と技能の問題に課題があることがわかっています。

現在、教科と学年でこの結果を分析し、アクションプランを作成し、改善に向けているところです。

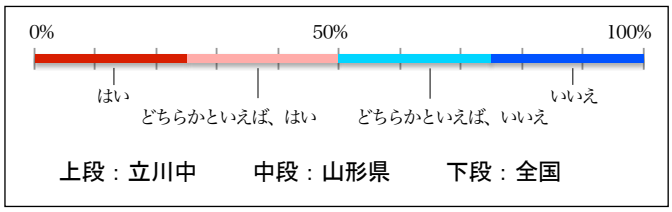


学年を越えてチームがまとまり、成功を収めた立中大運動会

３年生のリーダーシップと両軍の団結力、そして、戦いが終わった後のお互いを称え合う姿が地域の皆様・保護者から高く評価されました。

生徒質問紙から見えること

生徒質問紙は69問の学習・生活に関する質問からなります。立中生の回答は、多くの問題において、全国に比べ、肯定的な回答が高い結果でした。（８割の質問が上回る。）特徴的な項目を取り上げ、立中生の良さと課題を示します。



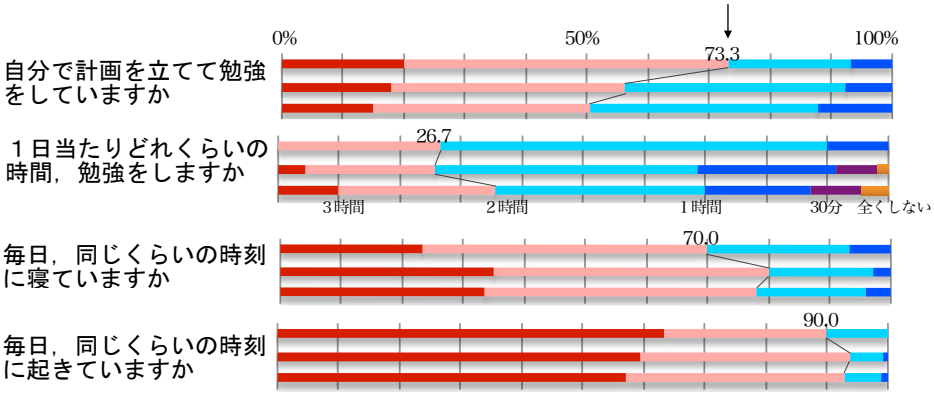
家での生活に関わること

計画を立てて勉強しているが家庭学習時間が少ない

起きる時間と寝る時間がその日によって違います。家庭学習時間が２時間以上、３時間以上は全国に比べ少ない状況です。

学習計画だけでなく、一日の生活全体を計画的に、見通しを持って過ごすことが課題です。

肯定的な回答（「はい」と「どちらかといえば、はい」をたした数字）

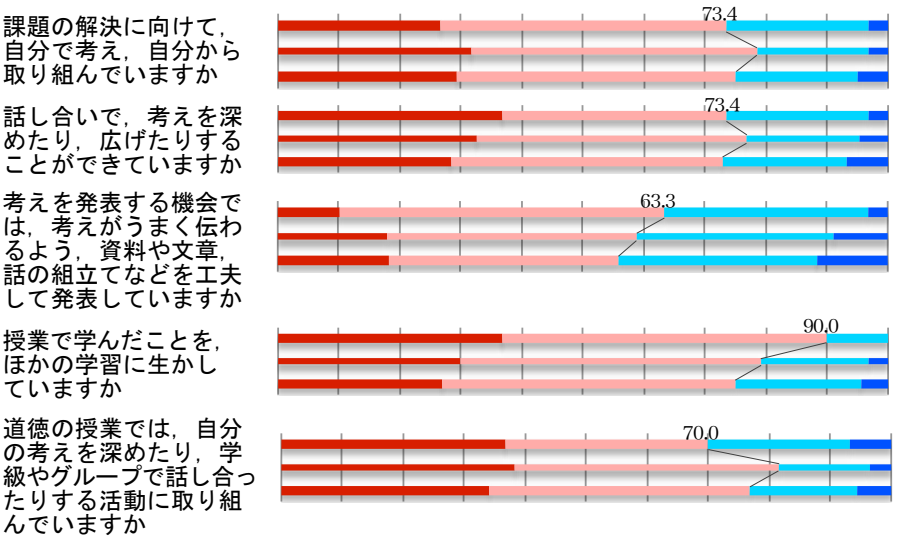


探究学習に関わること

自発的課題解決と話し合いで深めることに課題

山形県では、これからの時代を生き抜く子どもたちを育成するために探究学習に力を入れて取り組んでいます。

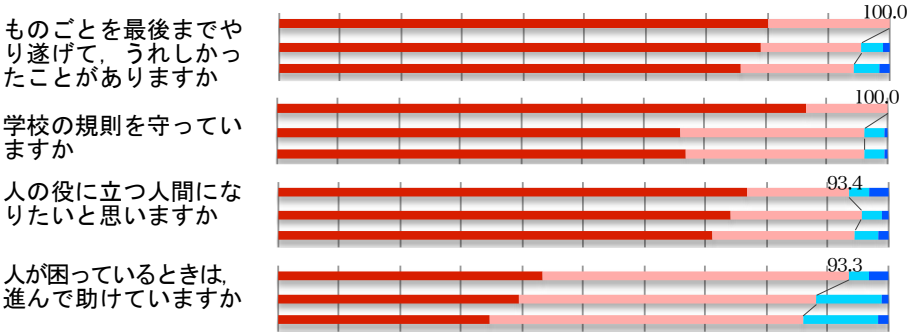
探究学習の項目は、全国に比べ、ほぼ同等ですが、課題解決に向けて自ら取り組むこと、話し合いで深めることがやや低い傾向があります。継続して指導していきます。



生徒自身に関わること

自尊感情と規範意識が高い

自尊感情の高さと規範意識の高さが表れています。これらを他者との関わりの中で、自己有用感へと高めていきます。

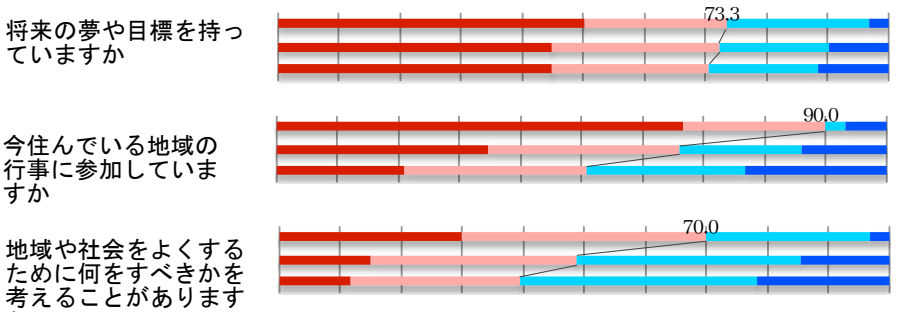


地域に関わること

地域貢献の意欲が育っている

将来の夢や目標を持っています。

人に役に立つ人間になりたいと思っていること、地域や社会をよくするために何をすべきかを考えていること、これらの高さから地域へ貢献しようとする意欲が育っていると言えます。この実践力を育むことが目指す方向です。



文責：校長　中 里 浩 也

自尊感情と自己有用感
自尊感情：自分に対する自己評価が中心
自己有用感：他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、相手の存在
があり生まれてくる。

褒めると認める

大人の側にしてみれば、この両者の違いはあってないようなものでしょう。「認めてあげよ うと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょ うか。そして、多くの子供も、そんな感じで受け止めていることでしょう。とりわけ、年齢が 低いほど、その差はないに等しいに違いありません。

しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」 と強く思っている子供には、そんな大人の言 い分は通じないかも知れません。中には、「褒められてもうれしくない」 といった子供も出て きたりするのです。一体、何が違うのでしょうか。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思 がわ

われます。そして、大人の側の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが 「褒

める」 という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には 「頑張りなさい」 と叱 まれ

咤激励することはあっても、褒めることは稀でしょう。
それに対して、子供が 「認めてもらいたい」 ときというのは、一般に子供の基準や水準で 「 褒められたい」 のではないでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたこと を 「認められたい」 のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも 「褒めてほしい」 と考えたり、大人の考えた水準に到達して 「褒められた」 場合でさえ、大人の基準とは異なる 子供の基準でも 「褒めてほしい」 と考えたりするわけです。 だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「みなさん、よく頑 張りましたね」 と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならな いのかも知れません。子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ち やほやしたりしても、子供の 「自己有用感」 はおろか、「自尊感情」 すら高めない可能性が高 いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子供自身に目標や工夫する点、努力する点など を考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが 「認める」 と いう行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かっ たと評価するだけの 「褒める」 では、「自尊感情」 を育むことはできても、「自己有用感」 を育 むことにはなりにくいのです。

例えば、「ふりかえりシート」 を用いているのであれば、児童生徒の振り返りに対して、た だ 「頑張ったね」 とだけ書くのではなく、その児童生徒が 「こだわった」 「見てほしかった」 点に触れた記述を返しましょう。そのためにも、一人一人をきちんと見ることが大切です。